

調査ノート

西相模の生活文化(1)

西海賢二

南足柄市史通史編1『自然・原始・古代・中世・近世』の原稿を依頼されたことをきっかけにして、文献調査に当たった時に民俗調査も併せて行ったのでその一こまを紹介することにする。なお紙幅の関係から今回はムラの組織なかでもムラの構造についての記述を中心にして報告をする。

ムラ（民俗学では村を一般にムラと表記することが多い）とは、今日の行政区画の村と異なり、近世の村もしくはそのなかの小字単位くらいを指す事が多い傾向にある。「ムラ」はその土地に何世代にも渡って定住し、主に農業・林業・漁業を生業の中心として営む人々の集合体として、共同体の機能を持ち、互いに連繋して生活を送る場所を総称している。

その中で、共同体としての道普請・堰ざらい・共有林の管理・用水の分配など共同労働、冠婚葬祭・屋根葺きなどの相互扶助、祭礼や近年の各種の催事などの共同の祈願や飲食が行われ、その構成に含まれることによって、人々の日々の生活は成立していた。

「ムラ」（村）は「ムラ（群）」と同義語であり、自然発生的に生まれてきたものが多い。さらに一時的なものではなく、長い間の共同体組織のなかで育まれてきたものである。しかし、「ムラ」は近代という名のもとに政治権力によってしだ

いに範囲が限定されたり、組織が整えられたり、当然の結果として行政上の役割分担が課せられることになってきた。近世期には南足柄市域に二五の村々があった。明治二十二年（一八八九）に町村制の施行によって、これらを統合して、新しい町や村がつくられていった。

しかし、その過程に生活そのものも時代の流れとともに変化し、共同体の構成にも変化が生じた。「ムラ」もまた時代とともに変わっていったのである。

例えば、近世の弘西寺の枝村向田は、昭和三八年（一九六三）に弘西寺から分離して向田自治会となっている。

さらに、昭和三十年以降における農業の兼業化や機械化あるいは生活様式の著しい変化によって、従来の「ムラ」の共同労働や互助組織はしだいに縮少もしくは廃止になったものも多い。

祭礼も日程を変更して日曜日に実施したり、「ムラ」の共同労働なども新住民に対しての配慮なども含めて出やすい休日に計画することが多くなっている。

ムラの中のクミ

江戸時代市域にあった二五の村は明治二二年の町村制施行以降ほとんどが大字として残り、現在の自治会へと移行しているところが多い。組の中には〇〇号組や班目の番組とよばれるところもあった。このほかニワとよばれるところも多く、三竹・中沼・地藏堂などに散見される。また、江戸時代の小名が一部を除いてそのまま活用されているところは、三竹・和田河原・荻野などに見られる。

市域では、カミノクミとかカミニワとよばれるところは、谷戸ならば谷戸の奥の方、川添いならば上流部に位置している。ただし、駒形新宿と広町のカミは集落の北側にある。

『新編相模国風土記稿』（天保年間に編纂された地誌、以下風土記稿と記す）にみられる竹松の「金井ノ庭」は、集落の北部にある八六四番地永塚から七三六番地田中家までで、これを金井講中とよんでいる。また、「河原ノ庭」は、集落の南西洞川沿いの一三九番地石野付近をいう。

壙下は戦国時代の『北条氏所領役帳』にはその名を見出せないが、慶長一七年（一六一二）の検地帳には壙下村と記

載されている。

『風土記稿』壺下村の項には「千津島に属す」とあり、かつては千津島の一部であったことが確認される。

壺下村では七軒百姓というクサワケの伝承があつて加藤姓（千津島の南部に多い）二戸、内田姓（下怒田・弘西寺にあり）二戸、大庭姓（菩提寺は塚原の天王院）二戸、露木姓（竹松と開成町牛島・宮台にあり）一戸が旧家として、いずれも集落の西部にある。『風土記稿』にある「曲師村」は、集落東部の露木家付近と伝えている。

上怒田では、明治末年から大正初年には五一戸あり、洞川上流にカミニワ（九戸）、その東に日影（一一戸）、若宮の南に堀ノ内（八戸）、これら若宮・堀ノ内の東側の洞川左岸の河岸段丘上に原（二三戸）があつた。これらの区分は『風土記稿』にある暮坪・日影・堀ノ内・若宮・梅小路・原の小名と一致している。「暮坪」はカミニワとなり、「梅小路」は原の一部となっている。

狩野では、集落のほぼ中央部にある清左衛門地獄池の北西から北にかけて、一区（上久保）・二区（下久保）があり、北東から東にかけて、三区（上馬場）・四区（下馬場）があり、南東に五区（門前）、五区の南側に六区（界戸・中丸）があつた。これも『風土記稿』の小名・久保・馬場・門前・界戸・中丸と一致している。また、同書の小名の中に「川下」とあるが、これは四区に含まれている加藤家一戸だけに現在も使われている。

飯沢では大正末年頃までカミ・ナカ・シモに分かれていた。カミは集落の西側で大雄町に接し、ナカは集落の東側で狩野に接し、シモは集落の北側で上総川・狩川に接している。『風土記稿』の小名に、堂ノ前・横道・宮上と見えるが、ナカの池田家の屋号がドウノマエといわれているのは観音堂の前の意があると思われる、この辺りがナカと推定される。

「横道」は、集落内を東西に通る狩野と広町を結ぶ道がシモの範囲にあることから、シモと推定される。

「宮上」は南足柄神社の西側で、地形的にも高くなっており、カミと推定される。

雨坪では、『風土記稿』の小名に西谷戸・高橋と見えるが、このうち「西谷戸」は集落中央部の雨坪公民館や弘行寺から西側の狩川沿いにある矢野家周辺で、現在はニシゲイトとよんでいる。「高橋」は公民館の南側にある石田家周辺をよんでいる。

福泉では『風土記稿』の小名に亀山・寺中・堺・原畑とあり、「亀山」は集落の北部で貝沢川沿いをいい、この辺には現在家はない。「寺中」は集落のほぼ中央にある薬師堂から東をいい、薬師堂から県道関本御殿場線までの間には旧家が集中している。「堺」は集落の西で弘西寺との境の辺りをよび、昔は一組であった。「原畑」は堺の東側で、字善能の一部となっている。

矢倉沢では、『風土記稿』の小名に本村・関場・足柄または地蔵堂とあるが、「本村」は内川沿いにあり、白山神社の南側にカミカワ、江月院から南側をネギヤシキ・北沢川と内川にはさまれたネギヤシキの東側をヒガシニワ、北沢川の北側をキタガワと分けていた。

「関場」は狩川沿いにあり、南西側にナガサカ、その北東に近世の矢倉沢関所があったセキバ・その東側がシタニワの三つに分かれていた。

現在の矢倉沢自治会は、昭和三五年に地蔵堂から分離したもので、本村、関場だけとなっている。しかし、自治体そのものは分離しても、江月院の寺の年中行事や白山神社の祭礼は今も一緒に行っている。

内山では、集落が大きいため、かつてはカミニワ・ナカニワ・シモニワと大きく三区分され、それが一八の組に分かれていた。カミニワは集落の西側を占め、乙沢川から内川の右岸までを含んでおり、そこに神明社や中学校がある。ナカニワは集落の中央部を占め、酒匂川と内川にはさまれ、内之御前社が北側にある。『風土記稿』の小名に神戸・方會・尾尻・摺手とあるが、「神戸」はシモニワの範囲内の東側にある字名、「尾尻」はナカニワの範囲内北側の字名、「摺手」はカミニワの範囲内・南側内川右岸の字名である。

前掲したように各旧村の区分では、それぞれニワとか組とか区とかにムラが地縁的に細分化され、その範囲内の構成員にフレ（現在の回覧）が伝えられ、身近な共同体として機能した。従来のニワや区は現在ではほとんどが組とよばれ、世帯の増加とともにその数が多くなり、市域には平成三年の末段階で、三五自治会、六六三組からなっている。

慶弔のつきあい

人生儀礼のなかで、冠婚葬祭は多くの近隣の人々の協力で行われた。なかでも葬式の場合は、前掲した最寄りの組を

越えてもつと広範囲の互助が見られた。

地域の慶弔のつきあいは伝承によれば、一番多いのは講仲間で、ムラの中に二ないし三分されている。次に多いクミは同族集団を中心に形成されたものである。また、最寄りの組単位で行っているところもある。このほか、ニワ単位やムラ全体で行ったところも見られる。

講仲間で行なったところとして三竹では、三竹公民館の近くのフドモリ（不動の森の意らしい）をさかいにして、カミニワ・ヤトニワ・ウシロニワをモリカミ・ナカニワ・シモニワをモリシモとよんで二分し、それぞれを講中としたという。付け届けはムラ全体に及んでいたが、葬式の役は講中で分担した。

岩原では、集落の中央を谷津田川が東流し、その北側と南例にムラは二分され、それぞれ四〇戸ほどで講仲間となっていた。北側で葬式がある場合、南側に役職をつけないが、南側からは付け届けに来たものである。

塚原の日影では、カミ・ナカ・シモの三つに分かれていたが、現在では組ごとになっている。塚原の日向では、ニシグミとナカグミで一つ、イチメンノクミとツカノダイで一つ、山下が一つと三つの講仲間に分かれていた。かつては板屋窪がニシグミとナカグミの講仲間に加えていたが、現在は分かれている。

和田河原では、大雄山線（大正一四年開通）の北側の坂下・原をカミ・大雄山線の南側から若宮神社・和田河原公民館の北側までの押切をナカ、若宮神社の南側の下和田・黒壺をシモの三つに分かれ、それぞれに講仲間があった。

竹松では、講仲間は五つに分かれ、集落内に分散していた。

班目では、旧小市村で一つ、旧班目村はカミ・シモの二つの講仲間に分かれ、これらの区分は道祖神の範囲と一致している。カミには一・二・三・八番組と四番組の多くが含まれ、シモには五・六番組と四番組の一部が含まれている。ただし、葬式の時に中心的に働くのは組によっている。

下怒田では、カミニワ（三・四区）、シモニワ（一・二区）で講仲間となり、これらをツキエイグミとよんでいた。

上怒田では、カミニワは戸数が少ないので日影の三戸を加えて一つ、日影の残りと若宮で一つ、堀ノ内と原で一つと三つの講仲間に分かれていた。今では原と堀ノ内に世帯が増えたので、それぞれ講仲間は独立しているが、不足する時

は協力しあっている。

飯沢はカミ・ナカ・シサモの三つの講仲間で、現在も継続している。

内山ではカミ・ナカ・シモの講仲間で、カミに葬式がある時は、ナカ・シモは付け届けに行く。かつてはこの付け届けには同族集団が中心であった。

次に、クミが中心となって葬式を行うところとして沼田では旧組が中心となり、三竹・岩原・北ノ窪（小田原市）からも付け届けに来たという。

雨坪では四つの組ごとに行い、墓の穴掘りやコシカツギ（棺かつぎの意）は組で出し、他の役は組の人が手伝ったという。

福泉でも四つの組単位で行っている。かつて福泉に葬式があると、雨坪・弘西寺から付け届けに来たという。弘西寺の人「雨坪・福泉とはオツキエイムラだったから、葬式の時はみんなが行った」といわれている。

弘西寺では実方組（実方姓ほか杉本姓一戸を含み一〇戸からなる）、内田組（内田姓をはじめ勝俣姓二戸、清水姓一戸を含む九戸からなる）、加藤組（加藤姓のほか磯崎姓一戸・小沢姓一戸・勝俣姓一戸・高橋姓二戸を含む六戸からなる）と同族を中心として組が構成されていた。これらの組は祝儀・不祝儀の時、次のような付きあいであったという。

出産の祝いは組単位で、結婚は組と近所で、家の新築や屋根替え、屋根葺きなどは三つの組すべてが協力し、葬式の時ヒト（葬式の事を伝える告げ人のこと）や穴掘り、コシカツギは組単位で行った。オモヤクや組内で行い、不足の時は近所付きあいの人を依頼した。

矢倉沢では最寄りの組が中心となって行い穴掘り、コシカツギは組から出した。

次に、ニワ単位で葬式が行われたところをみると、中沼では(1)ニシニワ(2)ナカニワ(3)押切(4)ヒガシニワ(5)シモニワの五つのニワが、協力していた。(1)に葬式があると、(1)で穴掘り、コシカツギを出し、供物持ちを(2)・(3)に依頼した。

同じように、(2)で葬式の時供物持ちを(3)・(4)へ、(3)で葬式の時供物持ちを(4)・(5)に依頼することになっていた。

壺下では、かつて(1)ヒガシニワ(2)ナカニワ(3)ニシニワの三つのニワが協力したものである。(1)で葬式の時、人手が不

足する時は(2)が協力、(2)で不足する時は(3)が協力、(3)が不足する時は(2)が協力した。

ムラ全体で葬式を行ったのは、集落の小さい駒形新宿や地蔵堂などである。駒形新宿ではかつては男も女も全部参加して行った。戦後は、男は全員参加だが、女の協力はカミ・シモに分かれた。当地には明治三四年(一九〇一)七月三一日から昭和六二年(一九八七)九月まで、八七年間にわたる記録として「埋葬役割帳」がある。

これによると、昭和四七年一月までは穴掘り二名、コシカツギ四名で行っていた。しかし、同年十一月二日から火葬となり、コシカツギはなくなっている。

地蔵堂では葬式が出ると、ヒトも穴掘りもコシカツギもすべて地蔵堂の人で行うことになっている。かつて矢倉沢で葬式が出ると、伍長(現在の組長)が袋をまわし、その金を代表して矢倉沢へ届けた。これを二戸で一〇錢ずつを入れ一〇錢講とよんでいた。とくに濃い親類へは別に香典を持参した。また地蔵堂で葬式の時、矢倉沢から代表者が参列したという。

ムラの役職

ムラは自治的な運営が基本である。そのためムラを運営する上で必要な役職が置かれていた。

ムラの長は現在の自治会長にあたる。この経緯を狩野自治会の資料によってみると、明治三九年(一九〇六)から昭和三九年(一九六四)までは区長、昭和三九年度から昭和四五年度までは部落長、その後、昭和四六年度以降は自治会長となっている。これらムラの長を勤めた人の中には、後年南足柄町の町長に選出された人もあり、一般に区長とよばれた時代はムラの有力者になることが多かった。

『南足柄市史資料所在目録第一集』の若原自治会所蔵の資料によれば、明治四〇年(一九〇七)から四三年までは惣代、翌年から昭和一八年(一九四三)までは区長、昭和一九年からは部落会長となり、昭和二六年からは区長となっている。

また、上怒田自治会所蔵の大正八年(一九一九)二月の「大正八年度役員名簿」の表紙には「総代加藤若太郎」と見え、本文の最初に「常役員加藤若太郎」と記入されている。この常役員は現在の自治会長にあたる。このように、旧南足柄村の狩野、旧岡本村の若原、旧怒田村の上怒田では多少の違いが認められるが、明治期以降惣代または常役員、区

長、部落長または部落会長を経て自治会長へと変遷をしている。

これに対して、同市内のうち塚原では日影・日向・台河原の各部落長の上に大区長が置かれ、大区長は水路整備、祭礼奉仕、火災防止などに関係した事柄を扱った。

例えば、火災が起ると、塚原の山（共有山）から木を伐り、仮住まいの小屋を建てることはこの大区長の権限で行ったという。

一般に区長の傘下には副区長、会計を置くことが多かった。荻野では会計を賄いとよんだ。弘西寺では戦後の農地改革が実施される以前は、ムラ共有地の収入でムラの賄いをしていた。また、区長、副区長、会計の下に伍長（現在の組長）が置かれた。このほか委員としては共有地の山道を扱う道路委員や伝染病の防止を扱う衛生委員・共有地の世話人・宮世話人などが置かれていた。

このほかに、沼田ではムラ全体が西念寺の檀家のため、総代と三人の寺世話人を置いている。若原では薬師堂を管理するため薬師係が二人置かれている。

生駒には南足柄市域に近年まで数カ所あった共同の水車があったので、水車係を四人置いていた。

班目では、大正一二年（一九二三）の関東大震災以前には水門があったので、水役を決めていた。

中沼では七月一二日の薬師さんの祭礼責任者としての社寺係があり、この係は足柄神社への奉仕や三年に一回の祭（大祭）りの責任者も兼ねていた。

弘西寺では、かつてはムラの行事などを伝える定使い（市域では中世末期から史料に散見される）があった。矢倉沢の本村では、貯金を徴集したり、本村の行事を決定する報徳の世話人が二人いた。

上怒田では区長役が終わると、翌年は道路委員になることが決まっていた。広町では区長役が終わると、足柄神社の宮世話人になることが多かったという。

ムラ寄合い

ムラの構成員が集まって、共通の問題、とくに役員の選出、ムラの諸行事などについて相談することをムラ寄合いと

いう。これには定期的なものと臨時のものがある。

定期的なものには、かつては年頭の初寄合いがどのムラでも開催された。初寄合いのことを、駒形新宿・生駒・壺下・狩野・弘西寺・雨坪・内山ではハツヨリエイまたはハツヨリエイとよび、飯沢ではソウシュウカイ、千津島ではシンネンカイとよんでいる。このほかにハツシュウカイ、ハツシュウケエとよぶところもある。

初寄合いの期日は、元旦が広町、正月三日、四日ころが和田河原、六日が岩原、一〇日が駒形新宿、一五日ころが内山、一五日過ぎが塚原日向、一月中が沼田、塚原日影などであるが、一番多いのは二月一日で、市域では一〇カ所のムラで開催されていた。

寄合いの場所としては、公民館がなかったころは、区長または部落長の家が主だったという。飯沢ではこの時寄せ太鼓という太鼓をならした。このほか、生駒では青年会場、竹松では観音堂、広町では大正二年（一九一三）にできた自彊館などが使用された。

矢倉沢では、初寄合（初集会）の時、共有地の炭焼き用材木の競売を行った。また、矢倉沢の本村では二月一五日に報徳の寄合いが世話人の家で開催され、昼食後には無尽をひらいていた。

ムラの共有財産

ムラで共有している山野は一般に入会山とよばれ、草刈り場（肥料や飼料用）・茅刈り場（屋根茅用）・薪山（燃料用）として利用し、農業生産には欠くことのできないものでありその材料を得るために、どのムラでも確保していた。

本市域の特徴（立地条件）として箱根外輪山の明神岳や足柄山地があるため、山野が多く、これら山麓のムラや足柄平野のムラで共同使用する入会（市域ではニューカイとよぶところが多い）地がある。

現在では名称は変わったが、内山の西方に南足柄市・山北町（足柄上郡）・開成町（足柄上郡）の一部事務組合地、矢倉沢の南西に南足柄市外五カ市町組合地、明神岳北東麓に南足柄市外二カ市町組合地、南足柄市外四カ市町組合地、南足柄市外二カ町組合地などがある。

班目の延享三年（一七四六）正月の「村鑑」には

- 一 馬草（一）苧敷、此外かや木苧申候場ハ、内山村・谷ヶ村山之三内ニ而入込ニ苧申候、道法壺里半ヨリ式里半迄
- 一 かや・そた木等ハ、足柄山又ハ駿州御厨領東山ニ而入込ニ苧申候、道法三里ヨリ二里半迄御座候。
- 一 苗代・苧敷取申候場所、河村向原村・岸村・山北村、此外中山家迄入込ニ苧取申候。

とある。

明治になって、小田原藩所有であった入会山は国に帰属したが、入会慣行はそのまま継続され、関係村は明治二〇年ころまでに払い下げを受けて、それらは入会村々の共有林野となった。入会山は明治後期以降、金肥の導入や生活様式の変化によって、原野から森林へと次第にその利用形態が変わっていった。

狩野では、明治四〇年（一九〇七）から入会山の植林をはじめている。場所は標高四〇〇メートル程の光明寺尾で、その後順次周辺に植林され、現在狩野生産森林組合（昭和五三年設立・組合員八七名）で管理する山林は約六〇ヘクタールになっている。

ムラの共有物には個人で揃えるのが難しい膳・椀や蛇籠などがある。膳・椀は講仲間やクミ単位に購入し、祝儀・不祝儀や各種の講ごとの時に使用した。

中沼のナカニワには、「椀式拾人前明治（一）^欠丁酉年正月新調之」と蓋に記入された木箱があり、一三名の氏名が書かれている。蛇籠は水害に備えて、中沼の薬師堂の縁の下に置き、石は土手の上に集めておいたという。

市域の橋もかつては板橋がほとんどであったが、大雨になるとよく流されたものであった。そのため、各ムラでは掛け換え用の橋板を用意したものである。生駒では公民館の敷地に現在も七枚あり、その橋板は厚さ九センチメートル、幅三八センチメートル、長さ八七四センチメートルほどのものである。

弘西寺でも、弘西寺境内の地藏堂裏に二枚の橋板がある。その板橋には「南足柄村刈埜小川ハシ」と刻まれている。板橋は一般にイタゴとよばれ、班目では福沢神社の境内に、八間（二四・四メートル）の長いイタゴと四間（七・三メートル）のイタゴが多数置かれている。これは橋が流れた時や、大口の競馬の栈敷などにも使われたものである。また四間のイタゴは屋根ふきの足場などにも使用された。

地藏堂では大正一五年（一九二六）から昭和二〇年ころまで、県から二〇〇〇円の補助を受けて、水力発電を行っていた。電気は各戸に配電し、精米、精麦、製粉にも使い、縄ない機もそれで運かしたものである。

生駒では、小瀬村氏の屋敷のムラの中央を流れる水路に沿うた一部の用地を借用してムラの共同水車があった。

南足柄市史編纂委員をはじめ県内高校の校長先生を勤められた故生沼清治氏所蔵の「水車設置願」には明治一五年（一八八二）三月に神奈川県令冲守固宛に出されている。この水車には二斗バリ（二斗搗く臼）が二つと、三枚バリと一って一俵の米を三つの臼で搗くものが並んであった。三四戸の共同で、一戸が一昼夜使用でき、鍵だけをまわした。前の人が朝起きて米をあげると、その後自分の米を入れて夕方まで一回搗く、そこで入れ替えて翌朝まで搗くと、一昼夜で四俵の米が搗けた。

生駒と同じように、ムラで一つの共有水車を使用したのは向田で、一二戸の番車だった。市内にはいくつかの水車があるが中沼の南部のふけ川沿いにあったオチャクルマ（落合車）は精米、製粉、製材も行う、市内で一番大きい水車であった。

明治一四年の「従前免許水車届下書」（明治大学刊事博物館蔵）によれば、千津島の遠藤家の水車は正徳二年（一七一二）三月の創立とある。

ムラ仕事

ムラのなかで、生業や日常生活のために構成員が共通して利用するものは、構成員全体でその維持管理するのが常であった。これらのムラ仕事に出仕することを塚原の日向ではムラ役、竹松、狩野、広町、雨坪などではソウツブシ、荻野ではソウツブレ、内山ではツブシ役とよんでいた。

これに対して、仕事に応じて七人とか十人前後に人数を限定して出仕することを生駒ではカド役、竹松ではコグチバン、内山ではナミ役とよんでいた。

ムラ仕事のなかでも中心は道普請とセギザライがあった。道普請のことをミチブシン、ミチツクリとよぶところが多いが、下怒田では秋道ツクリ、弘西寺では作道ツクリとよんでいた。

実施時期は春秋の二回のムラと、秋一回のムラとがあった。秋一回のムラでは稲刈の始まる前、一〇月初旬に農道を修理する。

荻野では秋一回で、午前中に足柄神社の馬場づくりを皆で行い、午後は各農道を修理した。

道普請には、ムラ内の道や農道を修理するほかに、入会山の道づくりも仕事として行った。狩野では久保の者がアズマオへ行く道、馬場の者はオトザカの道、門前、中丸、界戸の者はバクラクから舟石へ行く道を分担することになっていた。

飯沢では道普請の時、馬持ちのミチックリ、馬のない者はムラ内の道を修理した。その他の山つきのムラではそれぞれ山道の道づくりもした。

入会の道普請には、入会関係のムラに連絡をして、その持分に応じた人数を割りあてて、作業に参加させた。

壙下の「入会山道作人足心得」には

一人足六人 足柄山矢倉沢地先^キ

一人足拾人 大久保山福泉弘西寺地先^キ

一人足拾四人 岩山荻野地先^キ

合人足三拾人

右之通足柄山道作り者明治廿四年五月十九日大久場山及岩山共に全月廿日入会村々ヨリ人足差出し被申候事」とある。

セギサライは、普通に春の彼岸から四月にかけて、水田へ水を通しやすくするために、用水路にたまっている土をあげる作業をいう。しかし、用水路が急で土のたまらない三竹、広町、雨坪、福泉、矢倉沢などでは行わなかった。

樹木の枝打ちは、一般にコサギリとかコサオロシとよび、道にはみ出した枝や高い木などを切ることで、共同作業として行った。またコサオロシをめぐっては初午の行事の前後にするものだといわれ、かってすると怪我をするものだといわれていた。

足柄神社の氏子のムラでは、三年に一回三月三日の祭りの前に行った。コサギリの目的は祭礼の時の山車を通りやすくするためのほか、秋稲の粃を表庭に干した時に、隣の邪魔にならないためでもあった。

岩原、塚原、下怒田では稲刈りの始まる一〇月節供前に行った。この時はどこでも構わず切るが、高さが決まっているところも見られる。二間（三・六メートル）は駒形新宿、中沼、荻野、二間半（四・五メートル）は三竹、福泉、三間（五・四メートル）は生駒、和田河原、壺下、飯沢などであった。高さを決めているムラでは規定の長さの青竹をもって行って、それ以上の高さの幹や枝などを切った。この時は自分の家の枝が切られても、誰も文句を言わなかった。中沼では公平だということで、ニシニワの者はナカニワへ、ナカニワの者はヒガシニワへとニワの違う人が切るようになっていた。

このほか、野鼠退治やシバヤキを共同で行った。共有林の手入れとして、沼田・生駒などではハツヤマ（正月四日）に枝打ちや間伐を行っていた。

また、冬になると多くのムラで火の番も行った。関本では一二月一日から二月末日まで行われた。六人を一組として、個人の家を宿とし、夜三回歩いていた。その後青年会場ができてからはそこが宿になって、夜一〇時から夜明けまで行った。

地蔵堂では大正一五年（一九二六）に水力発電所が出来ると、発電所の番を二人で一晩担当することになった。当時は戸数が二四戸だったので月に三回当たることもあった。この仕事は男の仕事で、夕飯を食べてから翌朝まで、用水路のゴミを取ったり、オイルをさしたりした。利用者は一灯につき一円ずつ支払い、発電所設置費用の返済にあてていた。